

中国における聖徳太子

著者	王 勇
会議概要（会議名，開催地，会期，主催者等）	会議名：日文研フォーラム，開催地：国際交流基金京都支部，会期：1992年9月8日，主催者：国際日本文化研究センター
ページ	1-29
発行年	1994-11-05
その他の言語のタイトル	Chinese images of Shotoku Taishi
シリーズ	日文研フォーラム ； 45
URL	http://doi.org/10.15055/00005735

第45回 日文研フォーラム



中国における聖徳太子

Chinese Images of Shōtoku Taishi



王 勇
Wang Yong

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 梅原 猛

● テーマ ●

中国における聖徳太子

— 慧思後身説をめぐって —

Chinese Images of Shotoku Taishi

● 発表者 ●

王 勇

Wang Yong



発表者紹介

王 勇
Wang Yong

杭州大学日本文化研究センター教授

1956年生まれ。1982年、杭州大学日本語文学系卒業。1987年、北京日本学研究中心大学院日本文化コース修了。1987年、杭州大学日本語文学系講師、1988年同助教授。1989年より、杭州大学付設日本文化研究センター所長に就任して、現在に至る。1991年、杭州大学教授。1986年8月から1987年2月にかけて、訪問研究員として日本東海大学文学部に在籍。1991年11月より1992年12月まで、国際日本文化研究センターの招聘を受けて来日。専門分野は中日文化交渉史、とくに聖徳太子の時代に重点を置く。

【著 書】

『核心日語』（共著、杭州大学出版社、1991）

『聖徳太子時空超越——歴史を動かした慧思後身説』（大修館、1994）

『中日関係史考』（中央編訳出版社、1994）

【編 著】

『中国典籍在日本の流伝と影響』（共編、杭州大学出版社、1990）

『日本文化的歴史踪跡』（共編、杭州大学出版社、1991）

『中日文化交流事典・芸術巻』（遼寧教育出版社、1992）

『中日漢籍交流史論』（杭州大学出版社、1992）

【監 修】

『日本文化研究叢書』（杭州大学出版社、1990年から、続刊中。）

『越系文化新探叢書』（浙江人民出版社、1990年から、続刊中。）

【訳 書】

石田一良著『文化史学：理論与方法』（浙江人民出版社、1989）

一、南岳慧思と聖德太子

- 聖德太子の実像と虚像 (2)
- 南岳慧思の数奇な運命 (4)
- 慧思転生説の発生 (7)
- 倭国への生まれ変わり (10)
- 慧思と聖德太子の習合 (12)

二、鑑真渡日と聖德太子

- 鑑真渡日の動機 (15)
- 鑑真と蕭穎士の招請 (18)
- 儒教的世界観と仏教的世界観 (20)
- 鑑真と聖德太子 (24)
- 鑑真の渡日は聖跡への巡礼 (26)

一、南岳慧思^{えし}と聖德太子

□ 聖德太子の実像と虚像

歴史上の有名な人物は大概二つの顔をもっている。實在の人物としての顔と、伝説上の人物としての顔と、である。そして空間的に広く伝えられ、または時間的に長く記憶される人物ほど、後者の虚像がより豊富であり魅力的である。なぜなら、各地域・各時代の人々がその人物の再生に、それぞれの夢を託して潤色を加えつづけてきたからである。

日本の歴史のなかで、聖德太子ほど実像と虚像の交錯している人物はおそらく、ほかにいないであろう。聖德太子の虚像といえ、観音の顔があれば、釈迦の顔もある。道教の眞人と思えば、儒教の聖人にも例えられる。また、維摩居士と勝鬘夫人、甚だしきはキリストの面影さえ重ねられていると主張する人もいる。数多くの虚像のうち、中日文化交流史の視点からすれば、もっとも興味を引くのは南岳慧思の生まれ変わりである。

坂本太郎氏はその著『人物叢書 聖德太子』（吉川弘文館）の冒頭において、太子伝の執筆は「歴史家の悲しい宿命である」と嘆き、その理由を「古くからまつ

わりついた伝説のジャングルの中から、一筋の眞実の道を見つけ出すことは容易ではない」と説明している。

千余年もの太子信仰の堆積はいまや虚像のジャングルと化している。しかし、近代の歴史家はこのような太子の虚像を「荒唐無稽こうとうむけい」と一蹴して、実像のみの追究に精魂をかたむけてきた。かくして、近代史学の斧によって、無残に切り倒されてしまった虚像のジャングルの廢墟に、たとえ聖徳太子の実像が化石のごとくぽつんと顕われてきたとしても、なんという寂しい光景であらう。

梅原猛氏は「従来日本の国内の状況でのみ考えられた聖徳太子の像を、東アジア全体の状況の中で考え直すところからうまれる聖徳太子の新しい像」を求めて、かの名著『聖徳太子』（小学館）を世に問うた。時代の隔たりや国境の妨げを超越して、聖徳太子の原像に迫ろうとする著者の意志がひしひしと伝わってくる。

東アジア全体に聖徳太子を位置づけることによって、虚像のもつ歴史の意味があらためて認識される。というのは、聖徳太子と異文化との接点は実像よりも、虚像にあるからである。

□ 南岳慧思の数奇な運命

聖徳太子は、八世紀後半以降の太子伝では、ほとんど南岳慧思の生まれ変わりとして綴られている。それにもかかわらず、太子研究のなかで慧思の存在はあまり注目されていないようである。

聖徳太子への生まれ変わりは、南岳慧思にまつわる雄大な転生劇の一齣にすぎない。いわば、慧思伝説の全体からみれば、周辺のかつ末端的な存在である。聖徳太子とのかかわりを理解するためにも、日本転身にいたるまでの過程を明らかにしておかなければならない。

慧思（五一五―七七）は恵思・思大師・思禪師・思禪子・思大禪師・思大和上ともいう。晩年を南岳の衡山に過ごしたことから、南岳慧思と通称される。

道宣の『続高僧伝』や灌頂の『隋天台智者大師別伝』および慧思の自叙伝ともいうべき『立誓願文』などによれば、俗姓は李氏、魏の延昌四年（五一五）十一月十一日南豫州（今の河南省）の武津に生まれたという。

彼は十五歳のとき出家受具して、もっぱら『法華経』を読誦する。二十歳のとき、大菩薩心を発して、諸国を歩き名師を訪ねたところ、慧文に出会い、観心の法をうけた。その後、日夜をとわず研磨に励んで、とうとう法華三昧を悟った。

法華三昧とは成仏の修行法であり、さらに無相行と有相行に分けられる。

慧思はこのような修行法を自ら実践しながら、北方から南方へと移り、各地で『法華經』などを熱心に講説した。時あたかも南朝の梁が陳に滅ぼされる寸前にあって、一行は南北朝の境目にある河南の光州にいたり、しばらくその大蘇山にとどまった。

数年の間に、「生を軽んじ法を重んずる」信者たちがここに雲集して、競って慧思の教化を受けた。そのなかに、慧思より法華三昧を伝授してのちに天台宗を開いた智顗（智者大師）もいた。

北齊天保九年（五五八）、慧思は多くの門下や信者の協力を得て、河南光城県の齊光寺において、金字の『大品般若經』と『法華經』をつくり、瑠璃の宝函におさめ、それを石窟に秘蔵することができた。さらに『立誓願文』を撰して、造經のいきさつを述べつつ、自らの再誕と仏教の隆盛を予言した。

齊光寺での造經と予言は、南岳慧思と聖徳太子との習合の伏線を用意しておいた。すなわち、伝説は単なる再誕予言から、東海転生を経て、日本への生まれ変わりとといったふうに展開していく。また、聖徳太子が小野妹子を隋へ派遣した目的は、かの石窟に秘蔵されていた金字『法華經』の将来にあったと伝えられる。

ただし、日本における伝説の舞台は、北方の齊光寺から南方の衡山に移されていったのである。

南朝陳の光大二年（五六八）、慧思は門下四十人余りをひきいて、久しく徘徊した河南の地をさり、さらに南下して念願の衡山に入った。

中国では、昔から山岳信仰が盛んに行なわれていたが、漢代になると、五行思想に基づき靈験の多い五岳を定めて、国家祭祀の対象とした。その一つに数えられる衡山は、南方の湖南省にあるため、南岳と呼ばれた。

ときに、陳の宣帝は慧思の高徳をおおぎ、殊礼をもって迎え、「大禪師」の尊号をあたえた。陳の太建九年（五七七）六月二十二日、南北朝の乱世を力強く生き抜いた希有の名僧は、享年六十三歳にして、晏如として示寂した。

乱世の最中であって、自ら天災人禍に見舞われ、幾度となく生死の境界をさまよった慧思は末法濁世をなげきながらも、あらゆる生霊を救済せんと全心身をかけた。

かくして、慧思の波瀾万丈の生涯に心を動かされ、その高尚な人格を慕う人々は、あくまでも彼の死を拒み、仏教の転廻思想に基づいて、転身の虚像を創りつづけた。とくに天台宗では、彼の『法華経』宣揚および智顗への法華三昧の伝授

を賛え、自宗の遠祖に位置づけた。

□ 慧思転生説の発生

南岳衡山については、隋唐時代を中心に多くの地誌が作られている。唐・李仲昭の『南岳小録』や宋・陳田夫の『南岳総勝集』などをめくってみると、神仙的な雰囲気を漂わせる描写に終始している。

鑑真和上にしたがって来日した思託は『上宮皇太子菩薩伝』（『延暦僧録』より別行したもの）を著わし、儒・仏・道三教の修行者が衡山にむらがり、僧侶だけでも常に五千人ほどいると記している。

衡山を舞台に演出された無数の悲喜劇のなかで、慧思の「三生伝説」はとくに後世の人々に興味津々と語りつがれる。『南岳総勝集』と『統高僧伝』より、伝説のあらましを紹介しよう。

陳の光大二年（五六八）六月二十二日、慧思はさまざまな困難をのりこえて、念願の衡山にたどりついた。そこで、「私はむかしここで修行して、今は三回目の生まれ変わりだ」といって、前世の住寺や座禅の跡を示した。半信半疑の弟子らは地面を掘ったら、悪人に首を切られた慧思前生の遺骨が見つかったという。

話の順序は前後してしまいが、承和十四年（八四七）に帰国した入唐僧円仁は、中国から請来した「経論・金剛両部の大曼荼羅および諸尊の壇像・舍利ならびに高僧の眞影など合わせて計五十点」をまとめて、『入唐新求聖教目録』を著わした。その目録に「南岳思大和尚示先生骨影 一鋪三幅綵色」とみえるのは、右の伝説をリアルに描いたものと推察される。

慧思の「三生伝説」は鑑眞僧団によって、はやくも日本に伝えられた。思託は『上宮皇太子菩薩伝』で、このことを太子前世の事蹟として記している。内容を要約すると、次のようである。

衡山には千年の梨樹があり、開花結実すると、必ず聖人が現われてくる。ある時から、梨樹に花が咲く度に、慧思が現われ、自ら石碑を立てて、予言を記す。かくして、衡山に三つの石碑が立てられ、唐の人々はみな「南岳に行つて、思禪師の三生石を見よう」という。

慧思の虚像は時代と共に新しく創られ、やがて転生伝説は「三生」から「六生」にふくらんでいく。たとえば、同じく思託の撰した『大唐伝戒師僧名記大和上鑑眞伝』（以下『大唐鑑眞伝』と略す）に、「南岳衡山に（中略）思禪師あり、六生ともにこの山に於て修道す。一生ごとに一塔並び一盤石を立つ。その三石は般若台

仏殿の前にあり、三塔は般若台南の石室にあり」と記されている。

複数の太子伝に引用された撰者不明の『大唐国衡州衡山道場釈思禪師七代記』（以下『大唐七代記』と略す）は、慧思の衡山における六回の転生を具体的に示している。

○第一代は晋朝の許氏に生まれる。

○第二代は宋朝の崔氏に生まれる。

○第三代は齐朝の李氏に生まれる。

○第四代は梁朝の韓氏に生まれる。

○第五代は陳朝の駱氏に生まれる。

○第六代は周朝の姚氏に生まれる。

右の六朝はいずれも紀元二六五年から五八九年までの両晋南北朝の乱世に激しく入れ替わった王朝である。

慧思の転身は隋唐になっても続くが、海外への生まれ変わりがしだいに目立ってくる。

□ 倭国への生まれ変わり

『大唐七代記』によれば、達磨はインドから南岳に来て、慧思に「海東」への転生をすすめた。すなわち、

なぜこの山に化留し、十方に遍せざらんや。所以に因果並びに亡ぶ。海東に誕生せよ。かの国に機なく、人情麁惡なり。貪欲を行とし、殺害を食とす。よろしく正法を宣揚し、殺生を諫め止めしむべし。

達磨はこう言い残して、さきに東方へ飛んでいったという。伝説では、達磨は日本にいたり、飢人と化して、片岡山で聖徳太子と邂逅し、和歌を交わしたように敷衍されている。

当時、中国の感覚からいえば、仏教は西方より伝わってくるから、中国より東にはなかったはずである。換言すれば、求法は西へ、伝法は東へといったイメージはかなり固定化している。この意味で、慧思の「海東」転生は自然な成りゆきである。

慧思の再誕予言もこの成りゆきにしたがって変化する。つまり、『大唐鑑眞伝』に「われ滅度せば、仏法なき処に向ひ、身を受けて衆生を教化せん」とあるのが、『上宮皇太子菩薩伝』では「余、今東方の仏法なき処に往き、人を化し物を度せん」

となっている。

再誕の地はさらに「東方」「東海」から「倭国」へと具体化していく。『大唐七代記』は、慧思の六朝転生の記述につづいて、「身を第六の生に留め、機を第七の世に候つ（中略）所以に倭国の王家に生まれ、百姓を哀矜し、三宝を棟梁とす」と記している。これによれば、慧思の第七生は達磨の勧告にしたがって、東海中の「倭国の王家」に生まれ変わったということになる。

鑑真和上は唐天宝元年（七四二）、入唐僧の栄叡ようゑいらに渡日を請われ、次のように答えた。淡海三船の『唐大和上東征伝』より掲げておく。

むかし聞くに、南岳の思禪師は遷化の後、生を倭国の王子に託して仏法を興隆し、衆生を済度せりと。

右の文中に「むかし聞く」とあるから、倭国転生説は天宝年間より以前に、中国の江南一帯で流布していたはずである。この推論を裏づけるのは、『大唐七代記』に引かれた次の碑文である。

碑の下に題して云はく、倭州の天皇、彼の聖化する所なり。聖人の遷跡より隋代に至る以下、禪師の調度、金銀書・仏肉舍利・玉典・微言・香炉・經台・水瓶・錫杖・石鉢・繩床・松室・桂殿、未だ傾けず朽ちずして、衡山の道場に

皆悉く安置す。今代の道俗、瞻仰し帰敬す。李三郎帝即位開元六年歲次戊午二月十五日、枕桐錢唐館写し竟る。

「李三郎帝」とは玄宗皇帝のことを指し、叡宗の第三子に生まれたから、「三郎」の幼名があった。「開元六年」は元正天皇の養老二年（七一八）にあたり、倭国転生説の下限とみることができる。

□ 慧思と聖徳太子の習合

南岳慧思が東海、具体的には倭国に生まれ変わったことは、かの延々とつづく慧思転生伝説の自然な延長である。しかし、この伝説は日本の天皇家と結びつくことによって、思いがけぬ方向へ転換してしまったのである。

錢塘館の碑文に「倭州の天皇」とあり、『唐大和上東征伝』に「倭国の王子」とあるのは、日本の政教一致の風聞を下敷きにしていると推察される。言いかえれば、遣隋使や遣唐使によって、日本の仏教事情が多少なりとも中国にもたらされていたことを物語る。

はじめて日本に仏教興隆を奨励し、天皇家と仏教を結びつけた人といえば、聖徳太子をおいて、ほかにいない。ということは、聖徳太子の事蹟も入華僧らによっ

て宣伝されたに違いない。

慧思の生まれ変わりは天皇・王子を経て、聖徳太子へと接近していく。とくに、鑑真僧団の渡日をきっかけとして、南岳慧思と聖徳太子のかかわりはより明確な形をとって現われてきた。

思託撰の『上宮皇太子菩薩伝』は内容上大きく二分して、前半は慧思と南岳の叙述に全体の約三分の二をさき、後半は聖徳太子の事績に充てている。前後をつなぐのは「思禪師、後ちに日本国橘豊日天皇の宮に生まる」という一文である。

橘豊日天皇はすなわち用明天皇のことであるから、右の慧思後身はいうまでもなく、用明天皇と泥部穴穗部皇女との間に長子として生まれた聖徳太子をさす。慧思と太子の習合はここから始まり、伝説の舞台を海外に広げていく。

『聖徳太子伝暦』（平安時代）によれば、聖徳太子は自らの前身を妃に語り、今は「第七代なり」といった。その前身とは同書の推古二十六年（六一八）の条に詳しく記されている。

冬十月、太子妃を召し、命じて曰はく、「吾が昔の世、微賤の人なり。師の法華経を説くに逢ひて、家を逃れ髪を剪りて沙彌となる。修行すること三十余年、衡山の下に身を捨つ。今この時を憶ふに、晋末の世に当る。魂を韓氏の腹に宿

し、また人と為り得。(中略)即ち衡山に登り、修行すること五十余年なり。宋文帝の世に当り、また身命を捨てて劉氏に託生し、また男と為り得。出家して入道すること、四十余年を経たり。身を彼に捨て、高氏に生まる。この時、齊王は天下に君臨す。また衡山に修行すること六十余年、命を此に捨つ。梁の世に当り、梁相の子に託生す。また出家して入道す。猶も衡山に在りて、七十年を経たり。陳周の世を歴て、必ず東海の国に生まれて仏法を流通せんと誓願す。身を第六の生に留め、機を第七の世に俟つ(後略)」と。

慧思の伝説はそのまま太子伝に吸収されている。のみならず、聖德太子の事蹟も新しく解釈される。たとえば、遣隋使の派遣は前世持誦の『法華經』を将来するためとあったり、日羅・阿佐王子・観勒など半島人の来日は衡山にありし時の宿縁を追ってきたとあったりする。

『聖德太子伝私記』(一二三八〜四七)は上宮王院舍利殿の「種々宝物」をあげつつ、経台・経笈・念珠・周世尺・印仏・針筒・袈裟などに「六生」「先生」と註記している。それも慧思との習合によって、太子ゆかりの舶来品に対して、与えた新しい解釈にすぎない。

興味深いことは、太子安息の場所まで南岳の衡山にたとえられている。道澄の

『聖德太子の廟に謁す』という五言律詩の序文に、「余聞くに、太子の前身は慧思禪師と為りて、生々衡岳山に於て修道す。故に彼の中に一生岩・二生塔・三生蔵の遺跡が存す。この邦に応化するに迄りて、儲君の身に現る。百姓を安撫し、三宝を興隆す。薨りて後に全身を此処に葬る。然るに則ち此処は、東方の衡岳山なり」とあるのは、偶々管見に入つた一例である。

二、鑑眞渡日と聖德太子

□ 鑑眞渡日の動機

天平勝宝五年（七五三）十二月、中国律宗の高僧鑑眞は、十二回目の遣唐使副使大伴古麻呂の船に身を隠して、盲目のまま日本に漂着した。唐天宝元年（七四二）、入唐僧の栄叡らの招請をうけて渡日を決意してから、はやくも十二年の歳月が過ぎさつたのである。

その間に、前後六回にわたって渡海をこころみたが、うちの五回はことごとく失敗に終わった。鑑眞に随行した僧俗のなかで、三十六人が生命を失い、二百人

あまりが途中で脱退した。最初から最後まで鑑眞について日本に到着したのは、わずかに中国僧の思託と日本僧の普照の二人のみであった。

小野勝年氏は鑑眞の唐における地位に注目して、その渡日の動機に疑念をいだき、つぎのように述べている。

完成した律大徳としてすでにゆるぐことのない宗教的地位を築きあげていた鑑眞のことであつてみれば、よしんば引き続き唐土における戒律活動に従事したとしても、その業績は偉大であつたに相違ない。そうした安全な確率を捨てて、あらゆる面で冒険な方途を彼に選ばしめたのは果たして何故であろうか。

〔鑑眞とその周辺〕

右の設問に対して、小野氏は自ら三つの解答を考えていた。つまり渡日の動機として、「第一にわが国から派遣された栄叡や普照らの留学僧の熱誠のこもった招請運動によって大いに動かされたこと」、「第二には聖徳太子という不世出の篤信政治家があらわれ、日本に仏法を興隆せしめ、それによって政教一致の理想国家を実現せんとしたが、実はその精神が、百年をへてなお引続き日本に生きていることが鑑眞の心を惹いた」ということ、「第三には日本が鑑眞にとって戒律宣布の処女地として十分に魅力的であつたこと」を挙げている。(同右)

聖德太子と鑑眞渡日の因果関係について、福井康順氏も肯定的な見解をしめし、「鑑眞の渡東の際の問答もあり、聖德太子に対する敬慕の念を表明しており、即ち過海の動機をば示唆している大事な発言なのである」と指摘している（「聖德太子の『南岳取経』説について——附、鑑眞渡海の動機——」）

ここで「大事な発言」というのは、鑑眞と栄叡の間に交わされた問答である。この時の情景を、淡海三船撰の『唐大和上東征伝』は次のように活写している。

栄叡・普照師、大明寺に至り、大和上の足下に頂礼して具さに本意を述べて曰はく、「仏法東流して日本国に至れり。その法ありと雖も、伝法の人なし。本国にむかし聖德太子あり、曰はく、二百年の後、聖教日本に興らんと。今、この運に鍾る。願はくは和上東遊して化を興したまへん」と。

大和上答へて曰はく、「むかし聞くに、南岳の思禅師は遷化の後、生を倭国の王子に託して仏法を興隆し、衆生を済度せりと（中略）これを以て思量すれば、まことに仏法興隆に有縁の国なり」と。

右の記事をそのまま信じるならば、鑑眞の渡日は太子信仰となんらかの関わりをもっていることになる。

ところが、辻善之助氏をはじめ、学界では鑑眞と栄叡の対話を渡日後の思託の

作為によったものとする意見が一般化している。この意味で、鑑眞渡日のなぞはまだ未解明のままであるといえよう。これについての筆者の考えをしめす前に、まず鑑眞渡日の前後事情をふりかえってみたい。

□ 鑑眞と蕭穎士しやうえいしの招請

天平勝宝四年（七五三）春ごろ、藤原清河を大使とする十二回目の遣唐使は難波津を出帆して、無事揚子江附近に着岸した。

天平勝宝期の遣唐使は、当時造営中の東大寺の大廬舎那仏に塗るべき黄金の不足分を中国から調達するのが主要な目的であったと言われているが、それよりもっと重大な使命が彼らに与えられていたようである。

その使命とは一体なんであろうか。蔵中進氏はその著『唐大和上東征伝の研究』で、戒師の招請を藤原清河らに託した可能性の大きいことを示唆した。また井上薫氏は、遣唐使の出発は予定より二年遅れて大仏開眼のわずか一カ月前になり、黄金入手が大仏開眼に間に合わないことが承知の上であった事実に着目して、「本当の目的」は「栄叡らが道璿以上の大戒師を探し続けているが、その様子をつかみなかったことや、帰国を欲する阿倍仲麻呂らを迎えることも含まれていた」と

指摘している。(梅原猛ほか著『仏教伝来・日本編』)

『唐大和上東征伝』によると、遣唐使は玄宗皇帝に謁見したとき鑑真および弟子五人の名簿を提出して、日本に招きたいと正式に交渉したことが知られる。

日本は遣隋使以来、儒教と仏教をバランスよく摂取するため、学問生と学問僧を並行的に遣わしてきた。したがって、藤原清河らに与えられた使命の中に仏教文化を担う高僧とともに、儒教文化を担う文人の招請を含んでいるはずである。ここで、『新唐書』のつぎの記録が注目されてくる。

蕭穎士、字は茂挺、梁の鄱陽王恢の七世の孫なり。(中略) 林甫死し、更めて河南府参軍事に調^{えら}ばる。倭国、使を遣はして来朝し、自ら陳^のぶらく、「国人、蕭夫子を得て師と為さんことを願ふ」と。中書舍人張漸ら、不可を諫めて止む。

蕭穎士の伝記を略述すると、彼は開元二十三年(七三五)進士に挙がり、対策第一の栄冠に輝いた。その後、一流の文人と交遊して名を天下に馳せ、さらに、蕭夫子と号されて集賢校理となったが、宰相の李林甫と齟齬して地方に左遷された。天宝十一載(七五二)十一月に李林甫が急死すると、蕭穎士は再び京官に復帰した。そのとき、倭国の使者は彼を国師として招聘したという。

この時期の「倭国使」といえば、藤原清河らをおいて、ほかにいない。したがっ

て、蕭穎士と鑑眞の招請は、同じ遣唐使によって行なわれたとみるべきである。

ところが、唐人招請の公式な交渉はどうも不調に終わったらしい。唐天宝十二載（七五三）十月、藤原清河らは長安を辞して揚州の延光寺にいたり、鑑眞に交渉の結果を報告した。

弟子など、さきに大和尚の尊号ならびに持律の弟子五僧を録して、すでに日本に向ひ伝戒せんことを主上に奉聞せり。主上、道士をつれ行かしめんことを要す。日本の君主、ふるく道士の法を崇めず。（中略）これがために、大和尚の名も亦た奉し退けたり。

つまり、遣唐使が鑑眞の招聘を願い出たところ、玄宗皇帝は道士をつれていくことを要求した。日本の天皇は道教を信仰しないから、道士の渡日を拒否するために、鑑眞の招請を自ら撤回したという。

一方、蕭穎士の招聘も『新唐書』によれば、張漸らの役人に反対されて、実らなかつたようである。

□ 儒教的世界観と仏教的世界観

かくして、公的な交渉は異文化間のズレによって、惜しくも失敗に終わった。

しかし国家意志とは別に、僧侶としての鑑眞と文人としての蕭穎士がどんな態度を示したか、これまた興味深い問題である。

まず、蕭穎士についてみよう。劉太眞の『送蕭穎士赴東府序』によれば、彼は病氣を口実に、日本の懇請を断わったのである。

頃^{このごろ}、東倭の人、海を踰へて来賓し、その国俗を挙げて、夫子に師せんことを願ふ。敢へて私請するに非ず、天子に表聞するなり。夫子辞するに疾を以てし、而して之に従はざるなり。

蕭穎士の渡日拒否は、さまざまな原因が背後にあるが、主として華夷思想によったものと考えられる。

華夷思想とは、つまり中国を文明の発祥地とし、周辺の諸民族が中国との距離が遠くなるにつれ、文明度が漸次近くなるという儒教的な世界観をさす。世界文明の中心地にあつて、読書に読書をかさねて科挙に受かつて出世したのが、すなわち蕭穎士のような文人官吏である。

中華のピラミッドにのぼりつめた彼らにとって、未開の僻地と位置づけられる「東夷」へ渡る理由は一体どこにあるうか。むしろ中華を遠ざけて夷蛮に近づくことは、彼らの文明志向と離反する異常な行為とみられ、儒教的な世界観からは拒

絶されなければならない。

それに、中国の歴史を通観してみると、勅命を負わされた使節、巨大な利益に命を惜しまなかった商人、宗教心に駆り立てられた僧侶とは違って、儒教的な温室に育った文人たちが功名の世界に没頭して、自主的に海外へ赴く冒険精神に欠けていることは、近代以前のどの王朝にもあてはまる事実と認められる。

蕭穎士とは対照的に、鑑眞は正式の招聘が不可能となった最悪の事態にもかかわらず、唯一残された密出国の道をあえて選んだ。

両者の態度の相違について、東野治之氏は「それには、単に人物の違いというだけでなく、仏教のもつ世界性と漢学のもつ中国中心的な性格が反映している」と指摘する。〔『遣唐使と正倉院』〕

ところが、鑑眞の執拗な渡日志向は、単なる仏教の世界観で説明しきれないところがある。当初、栄叡らの招請を受けて、鑑眞は弟子らに渡日をすすめたところ、誰も応じなかった。高弟の祥彦は『涅槃経』の「人身は得難く、中国に生じ難し」という言葉を引き合いに出して、拒否の理由を弁明した。

また、鑑眞の渡日は日本側の熱誠のこもった懇請に心を動かされたとする意見もあるが、事実はそうではないらしい。というのは六回目の渡日は遣唐使に裏切

られての密航だったのである。

天寶十二載（七五三）十月、鑑真一行は遣唐使の提案を受け入れて、ひそかに揚州の龍興寺を脱出し、蘇州の黃泗浦に到着して遣唐使の帰帆に潜入した。

しかし、出発間際に、藤原清河らの態度ががらりと変わり、鑑真一行は船から全員追い出されてしまった。その原因はただの役人の責任逃れである。『唐大和上東征伝』は日本側の言いわけをつぎのように記している。

ただいま広陵郡、和上の日本に向はんことを知り、將に舟を捜さんと欲す。

若し捜し得られなば、使として歿ひあり。また風に漂はされて還りて唐の界に着くことあらば、罪惡を免れず。

弟子の、同宗の、信者の、そして祖国の再三の挽留をすべて押し退けて、日本からの招請に応じた鑑真らはここで見事に見捨てられ、まさに致命的な一撃を受けたのである。しかし不思議なことに、鑑真はこの屈辱をも呑んで、日本へ渡る初志を捨てなかった。そこで、さすがの副使大伴古麻呂も見るにたえず、鑑真らをひそかに自分の船に収容した。

こうしたいきさつ、それにこれまでの五回の渡航中に二百人余りが脱退したことを考え合せると、鑑真渡日の特異さが感じられ、その動機は仏教的な世界観に

おさまらないことが明らかである。すれば、一体なんであろうか。

□ 鑑眞と聖徳太子

『唐大和上東征伝』にみえる鑑眞と栄叡の問答はいうまでもなく、鑑眞渡日の動機をさぐる重要な手掛かりとなる。これによって、金治勇氏は「鑑眞は聖徳太子が南岳慧思の後身であるとの説に促されて渡日した」と断言する。（『上宮王撰三経義疏の諸問題』）

鑑眞と聖徳太子の関連づけは、最初是天台宗の僧侶によって提唱されたらしい。『慈覚大師伝』に「凡そ天台宗の本朝に伝はるは、聖徳太子、前身の経を迎へて、而してこれを南岳に得、鑑眞高僧、中道の経を提げて、而してこれを東朝に移す」とあるのは、聖徳太子と鑑眞和上を、ともに天台宗の遠祖と仰いでいる。

円仁は承和十四年（八四七）唐より帰国して、朝廷に表文を上り、天台宗の日本伝来をつぎのように述べている。

大唐の南岳思禅師の後身聖徳太子、不世の徳を以て、この国に転生す。即ち使を唐国に遣はして、旧経を迎へて取り、自ら章疏を製し、義理を講演す。その後、唐僧鑑眞など、遠く聖化を慕ひ、天台法門を將して来朝す。

右文では、鑑眞らは聖徳太子の「聖化」を慕って来日したように論じられている。このような信仰の起源は、日本天台を開宗した最澄にまでさかのぼれる。最澄は『註金剛鉾論序』において、天台創立の根源を聖徳太子と鑑眞和上に求めている。

伏して願はく、遠くは上宮太子を仰ぎ、近くは過海和上を憑^{たの}みて、この宗を建立せり。かの徳に報謝すべし。わが国の仏弟子、誰か二聖の恩を忘るる者あらん。

最澄の「二聖」への崇敬は、聖徳太子の『法華経』宣揚と鑑眞の『法華経』注釈書の将来に由来したものである。鑑眞将来の天台関係の章疏は以下の八部五十六巻である。

- 『天台止観法門』十巻
- 『法華玄義』十巻
- 『法華文句』十巻
- 『四経義』十二巻
- 『次第禅門』十一巻
- 『行法華懺法』一卷

○『小止観』一卷

○『文妙門』一卷

最澄は東大寺の戒壇院で具足戒を受けたとき、鑑眞将来経に巡り合い、それを書写して研鑽に励んだと言われる。そのいきさつは『参義伴国道書』や『叡山初祖行業記』などに伝えられている。

右に見られる聖徳太子と鑑眞の関連づけはあくまでも天台宗に対してのものであって、両者の間の直結関係ではない。つまり、鑑眞渡日と聖徳太子の因果関係を説明する証拠にはならないわけである。

□ 鑑眞の渡日は聖跡への巡礼

『本朝高僧伝』によれば、元興寺の律師隆尊は「国家に戒師なき」現状を深く憂え、舍人親王に名師の招来を建言し、「来たりて戒法を国家に流布せしめんことを願った。それがすなわち鑑眞招請のきっかけとなったのである。

一方、鑑眞の全宗教生涯を通じてみれば、彼は一貫して律宗の宣揚に徹しており、渡日後も日本側の要請に応じて、戒を授け律を伝えることに専念していた。なのに、鑑眞はなぜ天台經典をまとめて将来したのか。布教のためにもたらし

たとは考えられない。というのは、最澄の登場までに、これらの章疏は「物機の熟せざるを以て、緘封して世に伝はることなし」（『参義伴国道書』）というように、世間に流布しなかったのである。『元亨釈書』に「勝宝の間に、鑑眞、台宗の章疏を挾して来たり。時に偉器なれば、ただ函蔵するのみ」とあるのも、傍証となる。

さらに、凝然の『三国仏法伝通縁起』に、「鑑眞和尚、既に台宗をこの国に伝へど、未だ講敷を広めず、先に戒律を弘む」とあって、鑑眞僧団による伝教がなかったことを物語る。すると、天台章疏は鑑眞僧団が自らの信仰用にもたらしてきた可能性が濃厚に出てくる。

筆者はこれによって、鑑眞の内面世界に、天台宗への志向、言いかえれば天台開祖智顗への崇拜がひそんでいることを推測したい。栄叡と鑑眞の対話は思託の『大唐鑑眞伝』で、次のように記されている。

栄叡乃ち大明寺に向ひ、和上の足下に頂礼して具さに心事を論ずるに、「むかし本国の上宮太子曰はく、二百年の後、日本に律義大いに興らんと。然るに皇太子、玄聖の徳を以て日本国に生まる。三統を苞貫し、先聖の宏猷を纂す。三宝を恭敬し、黎元の厄を救ふ。まことに聖人なり（後略）」と。

和上便ち曰はく、「(前略)また天台智者曰はく、三百年の後、我が遺せる所の文墨、世に感伝せんと。大師無常して、二百年に泊ぶ。而して今大唐、国家の道俗、すべて大いに興隆せり。聖人の言語、未だ曾て相違することなし」と。右文では、栄叡の太子信仰に対して、鑑眞は熱烈な智顗信仰をもって応じている。『大唐鑑眞伝』は右文につづいて、さらに「その智者禅師、これ南岳思禅師の菩薩戒弟子なり。慧思禅師は乃ち日本に降生し、聖徳太子と為る。智者は唐国の分身、思禅師は海東の化物なり」と記している。

鑑眞の智顗信仰はその師の南岳慧思にさかのぼれる。慧思は「唐国の分身」として智顗に、「海東の化物」として聖徳太子に生まれ変わったから、鑑眞の宗教信仰仰は自然に聖徳太子にもおよんでいく。

ここで思い出されるのは、四回目の日本渡航をひかえて、鑑眞が過酷な自然を凌いで天台山国清寺を参拝したことである。鑑眞にとって、智顗ゆかりの国清寺は「聖跡」であり、自らの参拝は聖跡への「巡礼」であった。

程度の差はあるにしても、鑑眞の日本への渡航も慧思の後身を追って、過酷な自然を凌ぎ人為的な障害を押し退けての一種の「聖跡への巡礼」と言えるのではあるまいか。

*** 発表を終えて ***

発表が終わっても緊張感が解けなかったというのは、当日の心境であった。百人を超す熱心な聴衆に面して、予定の内容をすべて話しきれなかった憾みが残っていたし、また斯界の最高権威——梅原猛所長のコメントによって学問的な好奇心がつよく刺激されたこともあって、私は新しい探険に出ようという衝動に駆られていたからである。ちょうど一年後に大修館より上梓した拙著『聖徳太子時空超越——歴史を動かした慧思後身説』は、こうした緊張感のつづいた結果といえよう。

私にとって、日文研での体験は歴史研究への開眼を意味する。異文化間の複雑な交渉が毎日のように行なわれていた一年間は、文化交流史を「複眼」で観察すべきことを教えてくれた。そして、それを太子研究に生かしたのは、日文研の自由な学術空気と堂々たる教授陣に負うところが絶大である。

日文研の一員となって、「国家」や「民族」の概念を模糊とした。そのおかげで、漢字文化圏を視野に聖徳太子を捉えられたかもしれない。聖徳太子の転生伝説は「人種超越」という古代人の幻想を反映するものだとすれば、現代人にこのような想像力がもっとあってほしいと祈願してやまない。

最後に、日頃の研究指導を担当された中西進博士、コメントータをお願いした村井康彦教授、司会の労を煩わした白井祥子専門官をはじめ、関係者の方々に深甚な謝意を表させていただきたい。

王勇

日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ (ピサ大学助教授) Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン (日文研客員助教授) Engelbert JORI BEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン (大阪大学助手) Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ (日文研客員教授) Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがひ」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋 彙七 (慶北大学校師範大学副教授) SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト (ウィーン大学教授) Sepp LINHART 「近世後期日本の遊び—拳を中心に—」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア (テキサス大学助教授) Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像—現実と幻想—」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンズ (オベリン大学助教授) James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性—恵信尼の書簡—」

⑨	元. 2.14 (1989)	嚴 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元 .4.11 (1989)	劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ (オベリン大学助教授) Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋ー都市社会の自由とその限界ー」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性ー猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りにー」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント (東洋大学助教授) Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
⑭	元 .8. 8 (1989)	キム・レーホ (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12 (1989)	ハルトムート O. ローターモンド (フランス国立高等研究院教授) Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に來た中国人」
⑰	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント (ミネソタ大学助教授) Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通してみた日米社会構造の比較」

⑱	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ (フランス国立科学研究所助教授) Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑲	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ (インディアナ大学準教授) Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑳	2. 2.13 (1990)	カール・ベッカー (筑波大学哲学思想学系外国人教師) Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2. 4.10 (1990)	グラント K. グッドマン (カンザス大学教授・日文研客員教授) Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士－戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12 (1990)	リヴィア・モネ (ミネソタ州立大学助教授) Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
㉔	2. 7.10 (1990)	李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇－文化伝統からの一考察－」
㉕	2. 9.11 (1990)	馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
㉖	2.10. 9 (1990)	ケネス・クラフト (リハイ大学助教授) Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ (カイロ大学講師) Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのペーバルス王伝説における主従関係の比較」
28	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ (カレル大学日本学科長・日文研客員助教授) Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
29	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情ー古典から近代までー」
30	3. 3. 5 (1991)	ウィーベ P. カウテルト (ワーゲニンゲン大学研究員) Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報 ーゲオルグ・マイステルの旅ー」
31	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノヴィッチ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) Mikołaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー (オーストラリア国立大学リサーチフェロー・日文研客員助教授) Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都ーケンペルの上洛記録」
33	3. 6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ (ジャワハルラール・ネール大学教授・日文研客員教授) Satya. B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント (フンボルト大学教授・日文研客員教授) Jürgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鴎外記念館」

③⑤	3. 9.10 (1991)	ドナルド M. シーキンス (琉球大学助教授) Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅—50年間の日本とビルマの関係」
③⑥	3.10. 8 (1991)	王 曉平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」
③⑦	3.11.12 (1991)	辛 容泰 (東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員) SHIN Yong-tae 「日本語の起源 —日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る—」
③⑧	3.12.10 (1991)	洪 潤植 (東国大学校教授) HONG Yoon Sik 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
③⑨	4. 1.14 (1992)	サウィトリ・ウィシュワナタン (デリー大学教授・ 日文研客員教授) Savitri VISHWANATHAN 「インドは日本から遠い国か?—第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷—」
40	4. 3.10 (1992)	ジャン = ジャック・オリガス (フランス国立東洋言語文化研究所教授) Jean-Jacques ORIGAS 「正岡子規と明治の随筆」
④①	4. 4.14 (1992)	リブシェ・ボハーチコヴァー (プラハ国立博物館日本美術 元キュレーター・日文研客員教授) Libuše BOHÁČKOVÁ 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12 (1992)	ポール・マッカーシー (駿河台大学教授) Paul McCARTHY 「谷崎文学の『読み』と翻訳: アメリカにおける 最近の傾向」

43	4. 6. 9 (1992)	G. カメロン・ハーストⅢ (ニューヨーク市立大学リーマン 広島校学長・カンザス大学東アジア研究所長) G. Cameron HURST Ⅲ 「兵法から武芸へー徳川時代における武芸の発達ー」
44	4. 7.14 (1992)	杉本 良夫 (オーストラリア・ラトロップ大学教授) Yoshio SUGIMOTO 「オーストラリアから見た日本社会」
45	4. 9. 8 (1992)	王 勇 (杭州大学日本文化研究センター教授・日文研 外国人研究員) WANG Yong 「中国における聖徳太子」
④⑥	4.10.13 (1992)	李 栄 九 (大韓民国中央大学教授・日文研客員教授) LEE Young Gu 「直観と芭蕉の俳句」
④⑦	4.11.10 (1992)	ウィリアム D. ジョンストン(米国ウェスリアン大学助教授・ 日文研客員助教授) William D. JOHNSTON 「日本疾病史考ー『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」
48	4.12. 8 (1992)	マノジュ L. シュレスト (甲南大学経営学部講師) Manoj L. SHRESTHA 「アジアにおける日系企業の戦略転換 ー技術移転をめぐるー」
④⑨	5. 1.12 (1993)	朴 正義 (圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員) PARK Jung-Wei 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5. 2. 9 (1993)	マーティン・コルカット (米国プリンストン大学教授・日文研客員教授) Martin COLLICUTT 「伝説と歴史の間ー北條政子と宗教」

⑤1	5. 3. 9 (1993)	清水 義明 (米国プリンストン大学マーカンド荣誉教授) Yoshiaki SHIMIZU 「チャールズ L. フリアー (1854～1919) とフリアー美術館 －米国の日本美術コレクションの一例として－」
⑤2	5. 4.13 (1993)	金 春美 (高麗大学教授・来訪研究員) KIM Choon Mie 「近代日本知識人の思想と実践－有島武郎の場合－」
53	5. 5. 11 (1993)	タキエ・スギヤマ・リブラ (ハワイ大学教授) Takie SUGIYAMA LEBRA 「皇太子妃選択の象徴性 －旧身分文化との関連を中心として－」
54	5. 6. 8 (1993)	姜 希雄 (ハワイ大学教授・日文研客員教授) H.W.KANG 「変革と選択 : 10世紀の日本と朝鮮 －科学制度をめぐる－」
55	5. 7.13 (1993)	ツベタナ・クリステワ (ソフィア大学教授・日文研客員教授) Tzvetana KRISTEVA 「涙の語り － 平安朝文学の特質－」
⑤6	5. 9.14 (1993)	金 容雲 (漢陽大学教授・国際日本文化研究センター客員教授) KIM Yong-Woon 「和算と韓算を通してみた日韓文化比較」
⑤7	5.10.12 (1993)	オロフ G. リディン (コペンハーゲン大学教授・ 日文研客員教授) Olof G. LIDIN 「徳川時代思想における荻生徂徠」
⑤8	5.11. 9 (1993)	マヤ・ミルシンスキー (スロベニア・リュブリアナ大学助教授・ 日文研客員助教授) Maja MILČINSKI 「無常観の東西比較」

59	5.12.14 (1993)	ウィリー・ヴァンドゥワラ (ベルギー・ルーヴァン・ カトリック大学教授・日文研客員教授) Willy VANDE WALLE 「日本・ベルギー文化交流史 - 南蛮美術から洋学まで -」
60	6.1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン (ミシガン州立大学連合日本センター所長) J. Martin HOLMAN 「自然と為作 - 井上靖文学における『陰謀』 -」
61	6.2.8 (1994)	マイヤ・ゲラシモワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員) Maya GERASIMOVA 「外から見た日本文化と日本文学 - 俳句の可能性を中心に -」
62	6.3.8 (1994)	オギュスタン・ベルク (フランス・社会科学高等研究院 教授・日文研客員教授) Augustin BERQUE 「和辻哲郎の風土論の現代性」
63	6.4.12 (1994)	リチャード・トランス (オハイオ州立大学助教授) Richard TORRANCE 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学、1880～1930」
64	6.5.10 (1994)	シルバーノ D. マヒウォ (フィリピン大学アジア・センター準教授) Sylvano D. MAHIWO 「フィリピンにおける日本現状紹介の諸問題」
65	6.6.10 (1994)	劉 建輝 (中国・南開大学副教授・日文研客員助教授) LIU Jian Hui 「『魔都』体験 - 文学における日本人と上海」
66	6.7.12 (1994)	チャールズ J. クイン (オハイオ州立大学準教授・東北大学客員教授) Charles J. QUINN 「私の日本語発見 - 王朝文を中心に -」

67	6.9.13 (1994)	フランソワ・マセ（フランス国立東洋言語文化研究所教授・ 日文研客員教授） François MACÉ 「幻の行列－秀吉の葬送儀礼－」
68	6.11.15 (1994)	賈 蕙萱（北京大学教授・日文研客員助教授） JIA Hui-xuan 「中日比較食文化論－健康的飲食法の研究－」

○は報告書既刊

発行日 1994年11月5日
編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話 (075) 335-2048

問合先 国際日本文化研究センター
管理部・研究協力課

1994 国際日本文化研究センター

■ 日時

1992年9月8日

午後2時～4時

■ 場所

国際交流基金 京都支部

